

武蔵野文化協会ニュースレター

田沼武能先生を偲んで

2022年6月1日、武蔵野文化協会会員として長年ご尽力頂きました田沼武能先生が逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。ここでは、先生のご経歴の一端にふれ、哀悼の意を示したいと思います。

先生は、当会の趣旨にご賛同頂き、会員として長くご尽力を賜りました。

先生は、1929年浅草のお生まれで、1949年木村伊兵衛氏に師事され、戦後の焼け野原から驚異的に変貌を遂げる都市・東京と、そこに生活した人びとと、その暮らしぶりを撮り続けられた写真家であることは皆さん周知のことと思います。

写真集『武蔵野』（朝日新聞社、1974年）を発表されて間もない1981年に、当会機関誌『武蔵野』300号記念号刊行に際し、先生は「武蔵野」の光景を「武蔵野の人びと」と題して貴重な5枚の写真と共に、撮影にまつわるエピソードや思い出などを綴って下

さいました。改めて掲載させていただき、哀悼の意を示すとともにご冥福をお祈り申し上げます。

練馬長命寺での一枚に寄せて下さったメッセージには、「練馬の長命寺には立派な閻魔大王、十三仏が並んでいる。私が武蔵野に魅せられたのはこの長命寺、三宝池を散策するようになってからであった。それだけに私は武蔵野を感じたのであろう。」と、武蔵野への先生の思いが示されています。そして青梅の梅林で寛ぐ老夫婦と孫の遊ぶ写真では、手前に満開の梅の枝が写り、そのぼかしから和やかな春の日差しと色を感じます。

越谷の久伊豆神社参道ではしゃぐ子供たちと若い近所の母親の談笑の様子や、拜島の大日堂境内で見かけた老人会の人びとの民謡大会の様子など、日常の人びとの時間を切り取った写真から人を愛し、武蔵野を愛した先生のやさしいご心情が示されているような気

がいたします。ユニセフの親善大使の援助国訪問にはすべて同行されたそうで、世界中の子供たちを撮影されたことを知り先生のライフワークの一端が私どもの機関誌『武蔵野』に寄せて下さった写真とメッセージとからも窺えます。

つきなみな言葉ですが偉大な写真家であり、人間と平和な地球をのぞみ愛した巨人を失ってしまい、本当に残念でなりません。安らかなご永眠をお祈りいたします。

《御経歴》

サンニュース・フォトス、サン通信社での勤務を経てフリーランスとなり、東京工芸大学芸術学部教授、社団法人日本写真家協会会長（第5代）などを歴任。文化勲章受章者、東京工芸大学名誉教授、文化功労者、一般社団法人日本写真著作権協会会長。位階勲等は従三位勲三等。 <M>



《弘福寺をたずねて》令和4年3月26日実施

東京スカイツリー駅を出発して三井家ゆかりの三囲神社（三井家守護社～「三井高利」「越後屋」から屋号「三越呉服店」とした。）と境内にある旧池袋三越店頭にあったライオンの像（ロンドントラファルガー広場にあるライオン像がモデルとされる。）と弘福寺を訪ねた。今回は、寺ネット・サンガ（超宗派のお坊さんと皆さん）が参加。江戸の中国文化に思いを馳せた。

牛頭山弘福寺：住職・奥田純大師のご案内で参詣。開山は、鉄牛道機。開基は、稲葉美濃守正則（春日局の孫で、幕閣として重用）。彦根藩井伊家・鳥取藩池田家などの外護を受ける。鉄牛道機は、長門生まれ。京都洛西葉山浄住寺を中興、相模小田原藩主稲葉正則の招きで紹太寺などの開山。境内には、鳥取藩歴代藩主の墓、若桜藩（鳥取西館新田藩）藩主池田冠山、儒家南宮大湫（代々尾張藩家老竹腰氏に仕え、細井平洲に学ぶ）、暦算家・桃東園（著書に「異字同訓」）、儒者林東溟等の墓、弘前藩家老の子で、賀茂真淵に学んだ建部寒葉齋綾足の碑もあります。また、森鷗外は少年時代この地域で過ごしたとされる。

【参考まで】寺ネット・サンガのHPでも見学の様子が見えます。

(http://teranetsamgha.com/News/view/samgha_jimukyoku/238)



《》令和4年度 歴史講座開催《》

令和4年6月28日（火）、武蔵野文化協会歴史講座を開催しました（会場：東京都分寺労政会館第3会議室）。

この歴史講座は、本会の近世古文書部会がコロナ禍で活動を停止していましたが、コロナの一時的な収束状況により開催となりました。講師に川村由紀子先生（元東京都立中央図書館司書で、現在、当会評議員）をお招きし、「江戸城本丸御殿の図面と建築職人」と題してご講演を頂きました。そして近世古文書部会長である根岸茂夫先生（國學院大學名誉教授・本会副会長）には、「江戸の歴史教科書」と題して近世の往来物について、ご講演を頂きました。



連続講座 開催 !!

『鎌倉殿と鎌倉武士』

《巡見足立遠元と鎌倉街道・上野道を巡る》

本年度から始めた歴史講座「鎌倉殿と鎌倉武士」の一環でバスツアーを開催しました。JR高崎線桶川駅から旧中山道を通り、遠元館跡と顕彰碑を見学しました。その後、藤九郎盛長館跡を目指し、途中で1976年に発掘調査された国指定史跡埴輪窯跡・生出土窯跡を見学しました。窯跡出土の埴輪群は、2005年（平成17）国の重要文化財に指定されています。鴻巣市文化センター（クリアこうのす）の展示室を見学。推定上野道を通り、坂戸氏館跡（阿弥陀堂）、石戸氏と関係がある石戸の蒲桜と板碑保管施設（市管理）を見学（北本市市長室長の磯野治司氏解説）して、足立遠村館跡・畔吉の渡跡、遠元館跡（さいたま市六部堂）に向かい、鎌倉街道羽倉道（大宮台地に沿い上尾市平方を経て、桶川・北本・鴻巣を通過する）を見学しました（JR武蔵浦和駅で解散）。



連続講座「鎌倉殿と鎌倉武士」はじまる

令和4年4月30日（土）、東京都分寺労政会館第5会議室（4階）で開催。

第1回は、3名の講師をお招きしました。

金澤正大先生（日本中世史家、元西安交通大学外籍教師）には、「武蔵武士の足立遠元」と題してご講演いただきました（令和4年度の総会で当会評議員をお引き受けいただきました）。

次に、当会専務理事の加藤功先生に「足立遠元と鎌倉街道―上野道―を探る」と題してご講演いただきました。

最後は、日本古代・中世史家、政治経済史学会会長で、本会理事もお引き受けいただいている彦由三枝子先生が「京下りの公家と鎌倉殿―大江広元・中原親能・三善康信―」と題して、ご講演いただきました。

なお、本連続講座は、政治経済史学会・国宝史蹟研究会と本会が共催しての開催となりました。引き続き、以下の日程で講座を開催いたします。ご期待ください。

【今後の開催予定】

第2回目講座（8月20日）、第3回目講座（9月18日）、そして、10月29日に武蔵武士関連の遺跡見学会を開催予定です。

詳細は改めてご案内。

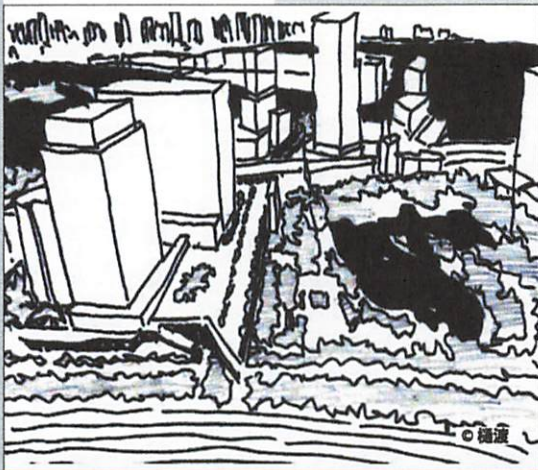




徳川家康が天正期、江戸入府によって近世社会へと移行するが、先ず家康は、天正19年陸奥の動静を見据えながら、山口・鉢形・河越・野方・府中・世田谷・小机領に宛行朱印状を出していた。その中から、黒目川沿いの片山七騎の領地関係の詳細な分析から、武蔵野における谷戸田畑の耕作から台地の畑作農業への変化を新田開発から読み解かれた。大変興味深い講演を頂きました。

文化財の活用を考える

「文化財庭園」と「都市」 が結びついた in 竹芝

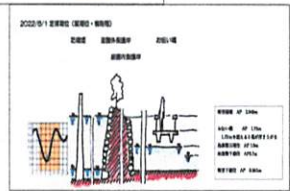
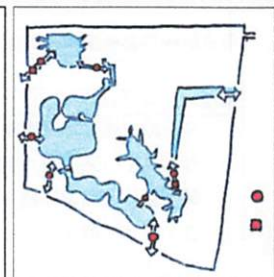
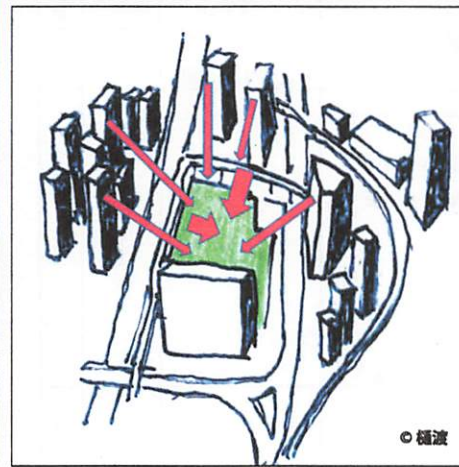


「文化財庭園」と「都市」が結びついた in 竹芝

2022年4月22日、竹芝にある旧芝離宮恩賜庭園（国指定文化財・面積43175㎡・開園大正13年4月20日・港区海岸一丁目）に沿って高さ約16mのガラス張りペDESTリアンデッキが开通了。これまで長い間この街では、「文化財庭園」と「都市」はそれぞれ別個の生活を歩んできたが、この日から合体し「文化財庭園都市」となったのである。この言い方は決して大げさではない。現地へおいでになればそれは一目瞭然である。JR浜松町駅北口のガラス張りのエレベーターを降りると、そこはもう「文化財庭園・旧芝離宮恩賜庭園」である。背後には超高層建築ビル群があり、遠くにはレインボウブリッジも見えるが、まず、圧倒的な庭園風景に驚かされる。このデッキの開通で、ビル街の通勤者を含め、一日8万人もの人々が文化財庭園の風景を、無料で鑑賞できるようになった。これまで年間10万人しか訪れていなかったこの庭は、一躍、地域の発展の牽引車となった。地域ではエリアマネジメント組織を作ってこの文化遺産を守り育ててゆくこととしている。ぜひ、一度訪れていただきたい。
(樋渡)



「潮入りの庭」を歩こう



JR新橋駅を降りると浜離宮恩賜庭園（国指定特別名勝・特別史跡〈名勝が先であることに注意〉・面積250215㎡・開園昭和21年4月1日・中央区）がある。江戸時代は将軍の庭で、その大泉水には海の水が引き込まれ、いわゆる「潮入りの庭」となっていることで有名である。年間70万人もの人が来園し、中でも八重桜の季節は混雑する。皇室所有の戦前は桜の園遊会が有名で、グラント将軍はじめ多くの貴賓がここにあった延遠館という迎賓施設で泊まっている。戦後は占領軍の演習場に使われジープが走り回っていたことを覚えている人は少ない。

「潮入りの庭」は有名であるが、その実情を知る人はほとんどいない。東京港の最大満潮は荒川ポイント（AP）で2m、最大干潮は0mであるのに池はなぜいつも同じ水位なのであろう。そこには庭の管理者による人知れぬ水位調節が200年以上にわたって行われてきたからである。池は4つあるが水位は全部違う。大泉水はAP0.6～0.9m、横堀0.6～0.9m、庚申堂鴨場1.0～1.1m、新銭座鴨場0.9～1.2mに保たれている。これらの水位は図にある7か所の水門と角落し堰で調整されている。このわずかの水位差で水に流れが起こり、池の水の水質が保たれてきたのである。したがって、江戸時代から試行錯誤で水路の改変を繰り返してきた。潮位は江戸時代も現在も同じである。一日に二回繰り返される潮汐を、江戸時代からずっと管理してきた忍耐と努力が、今日の見事な大泉水風景を生み出していることを、ぜひ知っていただきたい。いままでは事務所にあるモニターで遠隔操作をしているが、江戸時代は全部手作業であった。たまには、「潮入りの庭の裏の姿」を見る、少し変わったお庭拝見をされてもよいのではなかろうか。
(樋渡)

潮入りの庭を歩こう



